ケベックのフェミニズムに関する社会教育学研究

―実践コミュニティの意識化と知の生成－

概要

矢内　琴江

本研究の目的は、性差別によるあらゆる人権侵害を撤廃することをめざし、女性たち自身が現状の課題を認識し社会のあり方を変革していくために求められる知の生成の仕組みを解明することである。そのために、本研究では、フェミニズムが実践の軸となっているコミュニティの展開過程に内在する学習構造を分析する。具体的には、カナダ・ケベック州で1970 年代の社会変革運動や第二波フェミニズム運動の経験から誕生した 2 つの実践コミュニティの実践記録に着目して、コミュニティの学習の展開過程を、コミュニティのメンバー自身が性差別問題を克服していくための方法を創出していくプロセスとの関係において読みといていく。本研究は 3 部からなり、全 21 章で構成されている。以下にその概要を記す。

序論では、本研究におけるキー概念であるフェミニズム、意識化、コミュニティの内容に言及した上で、本研究の問題意識を次のように示した。まず、フェミニズムとは、女性たち自身が、この差別の現実と対峙し、その克服を課題として捉え、性差別の現実を変革する意志によって他者と連帯関係を築くことを通じて、性差別的な文化に根ざした社会構造を変革していく意識化のプロセスである。それはまた、性差別的な思考と言語、すなわち性差別文化に囚われた人々の認識の枠組みを転換する学びの実践であると言える。この学びの実践の主要な特徴は、第 1 に自己教育と相互教育の実践であること、第 2 に本来的に共同体的な実践であること、第 3 に学びを通じて、性差別文化とそれに根ざした社会構造を組織している知そのものを問いながら、知の内容、知を創造し伝達する方法を刷新する実践であることだ。したがって、本研究では、このような学びに取り組む人々の集団をフェミニズムの実践コミュニティとして捉えている。このコミュニティは、人々が、現実と向き合いながらより豊かに知的に成長し生きていくための力を得る学びへの欲求を、人種、性、階級といった社会的カテゴリーを超えて共有し合うことを通じて、価値や課題がコミュニティを構成する人々の間で共通のものとなり、相互に関わり続けようとする自発性、責任感、熱意などが共有されて形成されている。本研究は、このようなコミュニティの形成プロセス自体が意識化のプロセスとしての学習過程であり、性差別を克服していくプロセスであると捉え、カナダのケベック州における 2 つの実践コミュニティが刊行している実践記録の分析を通してその学習過程を解明する。

本研究で取り上げる 2 つの実践コミュニティとは、1 つはフェミニズム・アートのギャラリー、ラサントラル／ギャルリー・パワーハウス（La Centrale/ Galerie Powerhouse、以下ラサントラルと略す）、もう 1 つはケベック意識化グループ（Collectif québécois de conscientisation、以下 CQC と略す）である。

まず、ラサントラルは、1973 年、カナダ・ケベック州モントリオール市に設立された、非営利目的のアーティスト・センターである。女性アーティストたちによって自主運営されているアーティスト・センターの中では、カナダで最も古く、北米全体の中でも 2 番目に古い。ラサントラルのミッションは、「フェミニズム・アートの実践の歴史の展開に尽力し、既存の文化的制度では取り上げられることが少ないアーティストたちとその活動の可視化を支援すること」である。ラサントラルでは、1990 年から記録を出版している。本研究に

おいて分析の対象としたのは、『定まらない』（1990 年）から『フェミニズム・エレクトリック』（2012 年）までの刊行物である。

次に、CQC は、ケベック州の各地で、健康、社会福祉、教育の分野等の民衆団体、政治団体、女性団体、先住民団体、生活協同組合に関わっている人々のネットワークである。メンバーたちは、様々な社会的抑圧に立ち向かう実践に取り組んでいる。すなわち、CQC は、社会階級、ジェンダー、民族、国家、性的指向、知、文化、年齢などにかかわる抑圧的な諸関係の枠組みを実践と省察の往還を通して組み替えながら、人々の対等な関係に基づく社会の構築を目指している。1977 年に、教育をはじめとする社会的な諸問題に関わる行政職員たちを集めた「ケベック・コミュニティ・オーガナイザー連合」（Regroupement des organisateurs communautaires du Québec、以下 ROCQ と略す）が結成される。そして、1983 年、ROCQ は、意識化というアプローチのもとに結びついたコーディネーターたちの組織として CQC を結成した。CQC は、1983 年よりメンバーの意識化実践を記録してまとめた実践記録集を 3 冊刊行している。さらに、CQC は、個々の実践やフレイレの意識化に関するメンバーの考察を収めた『意識化ノート』を 13 冊刊行している。本研究は、これらの実践記録集、『意識化ノート』を分析の対象とした。

本研究では、上述した 2 つの実践コミュニティの学習過程の構造を明らかにしていくために次のような方法を採用することとした。

第 1 は、社会的・歴史的・文化的文脈を把握するという方法である。2 つのコミュニティが経験する意識化のプロセスは、ケベック社会の歴史と文化、またフェミニズムの歴史から切り離すことが出来ない。そこで、ケベックのナショナリズム運動の特徴に言及した上で、2 つの実践コミュニティが密接に関わっている、フェミニズム運動の展開を明らかにする。

第 2 は、2 つの実践コミュニティのケベックにおける位置づけを把握するという方法である。2 つの実践コミュニティは、ケベック社会の中にそれぞれ独立して存在しているのではない。ラサントラルはフェミニズム・アートの領域、CQC はコミュニティ・オーガナイゼーションの領域の中から生成し展開しているため、これらの領域がつくり出された歴史的社会的背景を探りつつ、先行研究における両コミュニティの位置づけを整理する。

第 3 は、両コミュニティの学習過程に焦点化した実践分析研究を行うという方法である。実践コミュニティのダイナミックな学習の構造を捉えるために、本研究では、両コミュニティのメンバーが執筆し出版してきた記録の分析を行う。分析のポイントは、以下の 3 点である。第 1 点は、コミュニティの生成・展開のプロセスと、実践の中での課題化の深まりとの関係である。第 2 点は、両コミュニティにおけるフェミニズムの意味と価値の言語化と、学習の展開との関係である。以上の 2 点をふまえて、第 3 点は、女性たちの意識化を支えるコミュニティの学習の展開を支える構造と、その構造を成り立たせる具体的な諸条件である。以上について、記録に記述されている具体的な事実を跡づけながら明らかにする。

第 1 部「問題構成」では、2 つの実践コミュニティの学習過程を分析するためのアプローチを、先行研究の蓄積の中に位置づけて説明する。第 5 章では、フェミニズムの実践コミュ

ニティにおける学習過程を分析する方法論を検討した。それにより、本研究は、社会教育学研究において、1980 年代以降に行われた、相互主体的学習論に立った女性問題学習の研究の方法論に依拠し、社会教育実践研究としてフェミニズムの実践コミュニティの学習過程分析に取り組むこととした。また、本研究では、記録を、過去を固定化するものとしてではなく、学習の方法として、評価の素材として、さらに民主主義を形成するメディアという動的な性格をもったものとして捉える。また、社会教育実践研究の成果が、実践コミュニティを複層構造をもつネットワークの中で捉える枠組みを提供したことについても論じた。

第 6 章では、社会教育における文化問題を取り上げた。まず、社会教育学研究では、文化芸術が 1 つのシステムとして、創作活動、批評、教育、研究、学芸活動などを通して、生産／再生産し強化している差別構造にまで論及している研究は行われてこなかったことを指摘し、本研究では、社会教育施設としての近代美術館の誕生の歴史と、ジェンダーの視点によって露にされた近代美術館の公共性の矛盾について論じた。さらに、ジェンダー美術史の学芸員たちの論考から、美術館の社会的使命、美術館と市民の関係のあり方を指摘し、また新たなミュージアム像も提示した。

第 7 章では、ケベック社会の歴史的形成について述べた上で、ケベックにおけるフェミニズムに関する研究を思想史的に概観した。その上で、2000 年代以降、ケベックのフェミニズムに特徴的な「第三波」フェミニズムを、これまでのフェミニズム運動・思想の展開を継承しつつも、フェミニズム自体を自己批判的に捉えることを重視し、自己を被抑圧者であると同時に抑圧者として認識し、他者との対話によって構築される新たな生の様式を創出する空間として描写した。

第 2 部「ラサントラル／ギャルリー・パワーハウスの事例－女性たちの創造性を支えるコミュニティの展開とその構造」では、ラサントラルが出版した記録を通してギャラリーの組織的な展開をあとづけ、その記録がコミュニティの展開に果たした役割と機能を検討することで、女性たちの創造性を支えるコミュニティを生成した学習構造を明らかにする。

第 8 章では、アート界における性差別について、ケベックの研究や調査から、アート界における女性アーティストの不在の問題を取り上げた後に、グリゼルダ・ポロックの議論を取り上げて、その根本原因として家父長制を体現したキャノンがあることを指摘した。このようなアートにおける性差別に対し、フェミニズムは差異の視点を投じ、作品批評だけではなく、大学や美術館などの構造改革を促す可能性を持つことを提示した。そこで、第 9 章では、ケベックにおけるフェミニズム・アートの展開を概観した上で、従来のラサントラルに関する先行研究を取り上げて、これまでラサントラルに関する実践分析研究は行われてこなかったことを指摘した。

第 10 章では、ラサントラルの記録を分析対象とし、ラサントラルの記録に収められた、組織的展開について記述した論考や年表をもとに、ラサントラルの設立の経緯から 2010 年までの組織的な展開を検討した。そこでは、設立当初の共同体的関係に基づくコミュニティから、バックラッシュやメンバーの変化に伴う活動の停滞期、企画の戦略変更と対外的連携

の発展によるコミュニティの強化、コミュニティの歴史の再認識による共同体的関係の価値の捉え直しを経て、ミッションの改正に代表される新たな方向性に基づく組織作りに至る一連の組織的な展開のプロセスを記述した。それにより、ラサントラルのコミュニティの展開過程を構成する諸要因を明らかにした。

第 11 章では、女性たちの創造性を支えるギャラリーの作品発表の役割に焦点を当て論じた。それにより明らかにしたのは、作品展を準備するプロセスは、ラサントラルにとって、コミュニティの民主的でフェミニズム的な組織運営のあり方の模索であると同時に、フェミニズム・アートの認識を形成するプロセスでもあったということだ。さらに、このプロセスは記録を通してフェミニズム・アートについて考察することによってさらに意味づけされていることを指摘した。そこでは、フェミニズム・アートは、男性中心主義的な表現の世界に、既存の文化制度から排除されている価値観や視点を出発点として他者と出会いと新たな価値を生みだす場であると捉えられている。ラサントラルは、こうした出会いと繋がりの場を、展示活動という実践と記録というテクスト的実践の両方によって創出している。

第 12 章では、女性たちの創造性を支えるラサントラルというコミュニティの主体について検討した。第二波フェミニズムの隆盛とともに誕生したラサントラルでは、フェミニズムという言説や、女性というアイデンティティがコミュニティを形成する中心にあった。しかし、作品を通して表現される主体やテーマの多様化に伴い、ラサントラルは記録を通してその主体を捉え直す。そこで、本研究では、ラサントラルでは、フェミニズム・アートにおける主体が、他者との関係の中で初めて存在するものであって、それゆえ創造性は、個々の主体の中に宿るものではなく、他者との対話的な関係が構築されるプロセスそのものとして捉えられていることを明らかにした。こうした主体の捉え直しは、ラサントラルのメンバーにおけるラサントラルというコミュニティの認識のあり方とも関係していた。すなわち、ラサントラルというコミュニティは、多様な個性のアーティストの集合体としてではなく、多様なプロジェクトが有機的に結びつき合った共同体として捉え直されたのである。

第 13 章では、2012 年に出版された『フェミニズム・エレクトリック』を分析し、ラサントラルの創造性を生み出すことを支える記録の特徴として、テクストの多様性、各テクストの自律性、テクスト間の対話的関係性の 3 点を挙げた。これらの特徴は、フェミニズム・アートを構成する創造的プロジェクトの多様性と、フェミニズム・アートの創造性を反映している点が注目される。

第 14 章では、モントリオール市の文化政策を批判的に検討した上で、ラサントラルの新しい戦略が、こうした文化政策のメインストリームに問いを投げかけ、マイノリティの立場から文化を創造する実践を生み出していることを明らかにした。さらに、ラサントラルの新たな戦略のみならず、ラサントラルの学ぶ場としての機能もまた、マイノリティの立ち位置から文化的価値を生成し共有するという役割を担っていることも指摘した。

以上をふまえて、ラサントラルというコミュニティの展開において、展示活動を中心とした実践と記録の出版というテクスト的な実践が両輪として機能していたことが明らかにな

った。記録が、コミュニティの展開にとって果たしてきた役割は 2 つあった。1 つ目の役割は、コミュニティの学習を支える方法としての役割であった。そのは、第 1 にコミュニティの歩みを跡づけ、さらなる展開に向けての方向づけを行うこと、第 2 に共同体による継続的な思考を維持することであった。2 つ目の役割は、フェミニズム・アートの展開を支えるメディアとしての役割であった。その機能は、第 1 に作品を評価する言語を獲得することにかかわり、第 2 に新たな創造性を構築することにかかわるものであった。

第 3 部「ケベック意識化グループの事例―フェミニスト意識化実践が創るコミュニティの学習とその構造」は、意識化実践のコーディネーターたちの実践コミュニティの形成過程と、このコミュニティが実践を通してフェミニズムの視点を獲得していく過程の相互関係を読み取り、人々のより対等な関係の構築を支えるコミュニティの学習構造を明らかにして、この学習を支える上で記録が果たした役割と機能を解明することを目的とした。

まず、第 16 章と第 17 章では、では、CQC が誕生した背景にあるコミュニティ・オーガナイゼーションの展開、その専門職であるコミュニティ・オーガナイザー（CO）の成り立ちとその組織化、さらに今日の危機的問題に言及し、その克服には CO 自身の実践における学びのプロセスに焦点化し状況の打開を図ることが重要であると指摘した。

第 18 章では、CQC のパンフレットの内容を分析して CQC の目的について検討を加え、CQC が実施している主要な意識化の研修をとりあげた。また、CQC の活動において記録とは、書き手である実践者にとっては自分自身の実践を省察する方法として、読み手である実践者にとっては、他者の実践経験から実践を展開していくための様々な知を学ぶ方法として位置づけられていたことを指摘した。

第 19 章では、CQC という省察的実践コミュニティの特徴とその展開を支える諸条件を明らかにした。CQC は、ROCQ の時期から、いくつかのコミュニティが重なり合う中で、支援者自身が、他者による実践を通して、また自らの実践の中で他者と学び合うことを通して意識化されていく組織学習の場であった。それにより、対等な人間関係に基づくコミュニティ形成のための組織学習のコーディネーターたちを生みだしていたことも指摘した。そこでの学習は、次の 3 つの視点からの実践と省察の往還を基軸に展開していた。第 1 は、アクションが民衆の主体的、かつ民衆との共同的な取り組みになっているかを見極める視点である。第 2 は、自分たちのコミュニティに内在する権力の諸構造を問う視点である。第 3 は、自分たち自身のその組織における振る舞い、他者との関わり方、立ち位置を批判的に捉える視点である。さらに、実践がより大きな文脈の中で社会的なプロジェクトとして位置づけられるためには、被抑圧者がどのような姿をしているのか、そして抑圧のどのような諸構造があるのかを捉える必要があることを指摘した。

第 20 章では、CQC が意識化実践の中で獲得してきたフェミニズムの視点を明らかにした。CQC は、今日の新自由主義的イデオロギーの蔓延を問題視し、全ての人間を問題の当事者、意識化実践の主体として位置づけ、あらゆる形態の抑圧に対抗する批判的意識の形成をめざす「自由の反抑圧的実践」を重視していた。CQC は、この実践を展開を通じて、抑

圧の経験は男女によって異なるがゆえに、フェミニズムの視点が不可欠であると認識してきたのである。CQC のフェミニスト意識化実践では、当事者である女性の学習者たちが、自らの抑圧状況を批判的に分析し、主体として声をあげるようになることが主要な目的であった。この目的は、本研究で取り上げた異なる領域において行われてきたフェミニスト意識化実践においても共通していた。さらに、これらの取り組みからは、CQC におけるフェミニズムの視点として、第 1 は、抑圧状況を、女性たちの個々の経験に即しつつ、女性たちをとりまく社会文化的な抑圧の諸構造の中で理解する多角的な視点、第 2 は、女性たちを問題の当事者であると同時に解決の主体として捉える視点、第 3 は、学習の展開を長期的な視点と、女性たち 1 人ひとりが持つ人生の時間軸の中で捉える視点を読み取ることが出来た。

このように第 3 部では、CQC の中でフェミニズムの視点をもって行われた実践の記録に着目したが、それらの記録の分析から見えてきたのは、性差別だけではなく、人びとの他者との関係や、社会の仕組みに構造化されている様々な権力的な支配構造を克服していくための実践を支える組織学習の構造である。本研究を通して、次の 3 点が重要であることが明らかになった。第 1 は、経験の多様性の尊重を基盤として、当事者同士がお互いの経験を聴き合う関係を構築することである。第 2 は、多様性の尊重を基盤として、意識化実践を支えるチームをつくることである。第 3 は、異なる意識化実践が相互に関係し合う重層構造をシステムとして構築することである。

本研究の結論では、2 つの実践コミュニティの学習過程の分析が導き出した、共通した性差別問題を克服する知の生成の仕組みについて、以下の 3 つの論点を提示した。

第 1 に、2 つの実践コミュニティに共通する最も重要な特徴とは、実践そのものが省察的であるという点である。第 2 に、このような省察的実践の営みが持続し発展的であるために、記録による実践の言語化は、両コミュニティにとって不可欠であったという点である。記録とは、それ自体が、実践の価値や意味を表現する言語を創造するためのプロセスなのである。また、記録は、アートあるいはコミュニティ・オーガナイゼーションという領域の展開において、フェミニズムの視点と各実践コミュニティの実践を位置づける媒体としての役割をも持っていた。第 3 に、2 つの実践コミュニティの展開過程を支えた要件として、異なる次元で機能する他のコミュニティとの協働的関係があったという点である。

最後に、今後の研究課題として次の 4 点を挙げた。第 1 は、ラサントラルと CQC に関する実践研究の継続である。第 2 は、両コミュニティがネットワークを構築する際にとった具体的手立てを明らかにすることである。第 3 は、フェミニズムのコミュニティ、さらにネットワークの展開において、高等教育機関の役割と機能の研究である。第 4 は、性差別をはじめとする諸々の差別の撤廃をめざす学習に関する実践研究の国際的ネットワークの構築である。